

皆さんは右の文章を読んで、いくつ課題を見つづけられましたか。

山積みのゴミからは、必要な食事をとらない、不衛生な環境で生活を維持するというような、通常の生活を維持する気力を失ってしまふ「セルフネグレクト」。寒いのに暖房を使っていない様子からは「貧困」。妻の様子からは「認知症」。引きこもりだった息子が年を取り、収入や介護などの問題に直面する「8050問題」といった様々な課題が浮かび上がってきます。

近年は、これ以外にも、親の介護と子育てを同時に行う「ダブルケア」の問題も増加しています。湖南省の高齢化率は現在24%

高年齢になり、日々の生活に不便を感じたときには、利用できるサービスを活用してほしいのですが、公的サービスでは対応できないこともあります。公的サービスで対応できないような困りごとは、どのように対処すればよいのでしょうか。そんな時に、地域で支え合う仕組みがあれば、高齢になり支援が必要な状態になっても、安心して暮らすことができます。

今、お互いが支え合い、住み慣れた地域で暮らしているよう、それぞれの地域に合った支え合いの仕組みづくりが必要とされています。私たちもその仕組みづくりについて住民の皆さんと一緒に、湖南省がいつまでも暮らし続けたいまちになるよう考えていきたいと思えます。



高齢福祉課課長補佐
主任介護支援専門員
川崎 知子さん

あなたのすぐそばにも課題は隠れています

**突然ですが、質問です。
この中にはどんな課題が隠れているでしょうか。**

ある冬の日、家の前を通るとゴミのにおいがするという高齢者夫婦（夫82歳、妻78歳）の家を民生委員が訪れた。確かに家の中には、ゴミが山積みになっている。暖房を使っていないようで、家の中にもかかおらずとても寒い。夫に「困っていることはありませんか」と尋ねたが、「ありません。ほっておいてください」と言われた。夫はしっかりと話ができるが、足が痛くて歩きにくいので、ゴミを出しに行けない。妻は、気がない様子で、あいさつもしない。夫によると、物忘れがひどくなっているらしい。

別の日に再び訪問してみると、2階から物音と人の動いている気配がした。聞くと、50歳になる息子が、学校卒業後から家に引きこもっているとのこと。小さな頃から人と話したり、一緒に何かをするのが苦手で、友達もいなかった様子。

家計は、夫の年金のみで預金もなく、かなり厳しい様子。歩いてスーパーには行けないため、タクシーを使って買い物に行っている。今後の生活を心配しているようだが、いろいろな問題を抱えており、何から解決していけばよいのかわからない。

どのような課題が隠れているか 書き出してみてください

社会的孤立・複合的な世帯の課題・制度のはざま



包括的相談支援体制

**身近な圏域での
我が事・丸ごと**

住民の主体的な課題解決力を強化し、専門職と連携して発見・解決する仕組みを作る

**市町村域での包括
的相談支援体制**

地域で解決できない課題は、専門職が分野を横断して連携し、丸ごと受けとめる仕組みを作る

住民主体の課題解決力

支援機関：関係者が介入しようとしても調整役がないので一体的な支援が難しい

支援者：他の課題を発見することがあっても分野が異なると世帯丸ごとの支援につながらない



相談者：課題が複数にわたる場合、どこに相談していいかわからない（相談につながらない／たらいまわしになりあきらめてしまう）

特集 支え愛のまちづくり

1人が1人を支える時代へ

下の図は、65歳以上の高齢者を、生産年齢人口と呼ばれる15歳以上65歳未満の人たちが、何人で支えているかを示したものです。2010年には2.6人で1人の高齢者を支えていましたが、2060年には、12人で1人を支えていかなければなりません。

2000年4月に介護保険制度が導入され、日本では、医療や介護、障害福祉サービスなどが充実してきました。しかし、その一方で、高齢化が進むにつれ、公的サービスの財源不足が問題となってきました。また、公的サービスだけではカバーできない、社会的孤立による孤独死などの問題も浮き彫りになってきました。

高齢者への支援はもろんのこと、支え手となる子どもたちにこの社会をどう受け渡していくのかということ、考えなければならぬ時代がきています。

みんなで
支え合う
まちづくりを
めざして

地域で支えあう まちづくり懇談会

地域福祉計画に掲げる基本理念「一人ひとりができる役割 もれない支援行ったり来たりの思いやりのまち」をもとに今年度、各まちづくり協議会で3回ずつ「地域で支えあうまちづくり懇談会」を開催しました。まちづくり協議会や区・自治会、民生委員・児童委員、健康推進員をはじめとする地域住民、事業所職員、市社会福祉協議会職員や市職員も一緒に、地域の課題や課題解決に向けた取組について話し合いました。

地域に「こういうのがあったらいいな」を出し合いました。



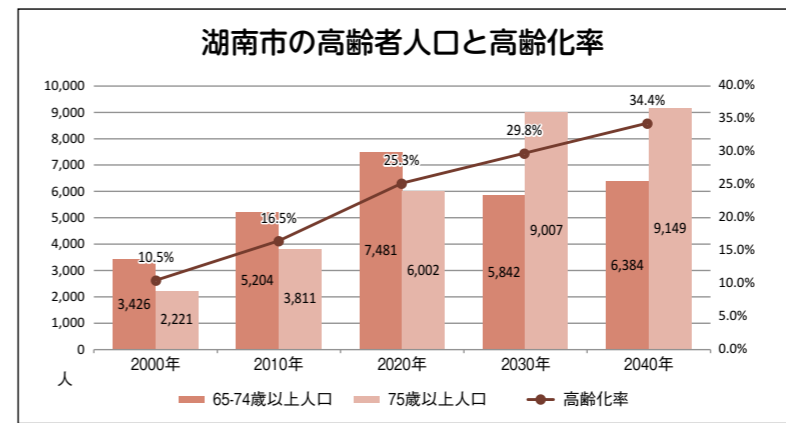
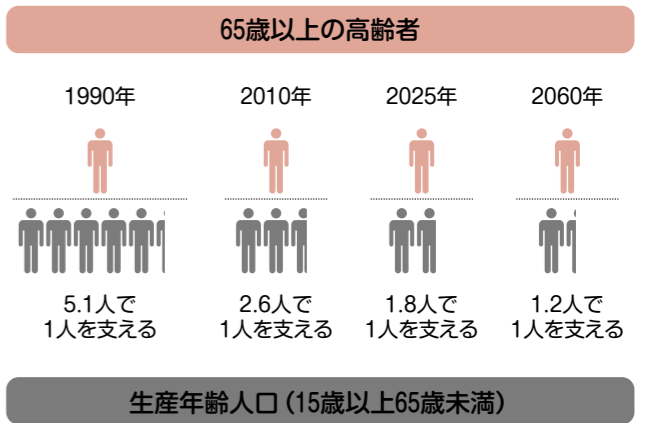
- 「高齢者や単身世帯の孤立を防ぐために、人と人がつながりあえる機会づくりが大切だね」
- 「避難訓練をするだけでも、訓練のついでに安否確認や一人で避難できない人の避難方法を探ることができるのでは」
- 「いざというときの助け合いのために、集合住宅に住む人にも自治会に入ってほしい」
- 「電球の交換やゴミ出しといった日常のちょっとしたお手伝いの仕組みがあればいいな」

- 「高齢者の自動車事故が最近よく問題になっているし、自分が運転できなくなった時の移動手段を考えて、デマンドバスやタクシーがあればいいな」
- 「百歳体操などのイベントの参加者が増えて、いろいろな人の居場所ができるといいな」

※地域で支えあうまちづくり懇談会の詳細をホームページで紹介しています。ぜひご覧ください。

今、深刻化する社会的孤立

高齢化率や生涯未婚率が上がり、高齢者のみの世帯や単身世帯が増えると、家庭の機能が低下していきます。また、会社や組織に属しているという帰属意識が低下し、人間関係が希薄になってしまう人もいます。このように日常のいろんな場面において、つながりが弱まり、家族や地域社会・会社とつながれない人が増えています。



また、暮らしの中では、電球の交換やゴミ出しなどの、日常生活への支援が必要な人や、軽度の認知症が疑われるけれど公的な支援を受けられない人などの問題もあります。そのような問題に直面した時、支援を必要とする人に対し、「我が事」として考えることで、誰もが安心して暮らせる地域づくりにつながります。

たとえば…

孤立している場合

ひとり暮らしの人が、ゴミを出す日がわからなくなると、指定日以外の日にゴミを出してしまいます。当然、まわりの人は注意をします。その後本人は、ゴミを出しにくくなり、家の中にゴミが溜まり始めます。まわりの人が無関心だと、溜まり続けるゴミに気が付かず、ある日、ゴミが家からあふれ出し、地域は大騒ぎになります。

「我が事」として考えた場合

間違えてゴミを出す日が続いたら、すぐに注意せず声掛けを行います。本人の様子がおかしければ、地域包括支援センターなどの行政につなぎます。専門家は認知症の診断につなげたり、地域住民はゴミ出しの声かけやお手伝いをしたりします。そうすることで、本人は安心して地域で生活を続けることができます。

懇談会で見えてきた地域の課題をこれからのまちづくりで生かそう

懇談会で話し合った課題は、地域で暮らす中での困りごとのほんの一部です。なんでも話し合える場だからこそ出てくる意見や小さな困りごとが、まちづくりの第一歩になるはずですよ。

何をプラスすればよいか、地域の困りごとは何なのか、孤立している人はいないか、活動資源をみんなで共有し、話し合いを積み重ねることで見えてくることがあります。

行政では行き届かない、地域での手の届く関わりが、支えられる人(困っている人)を安心させ、支える人はさらに元気に地域で暮らすことができます。

そんな地域での支え合いをめざしています。

～これからの地域運営と地域福祉を考える～

地域まちづくり フォーラム

日時

12月1日(土) 午前10時～午後4時

場所

市民学習交流センター(サンヒルズ甲西)

内容

第1部 テーマ

「地域運営組織の今後のあり方を考える」

●パネルディスカッション

パネリスト:地域まちづくり協議会
代表3人
区長会代表3人

コーディネーター:滋賀大学教授
石井良一氏

第2部 テーマ

「これからの地域福祉を考える」

●基調講演

「(仮)地域で支えあうまちづくり」

講師:全国コミュニティライフサポート
センター(CLC)代表 池田昌弘氏

●事例発表 石部南学区まちづくり協議会
菩提寺まちづくり協議会
柑子袋区
りんりんちょボラ

※当日は手話通訳もあります。

※福祉事業所等による物販もあります。

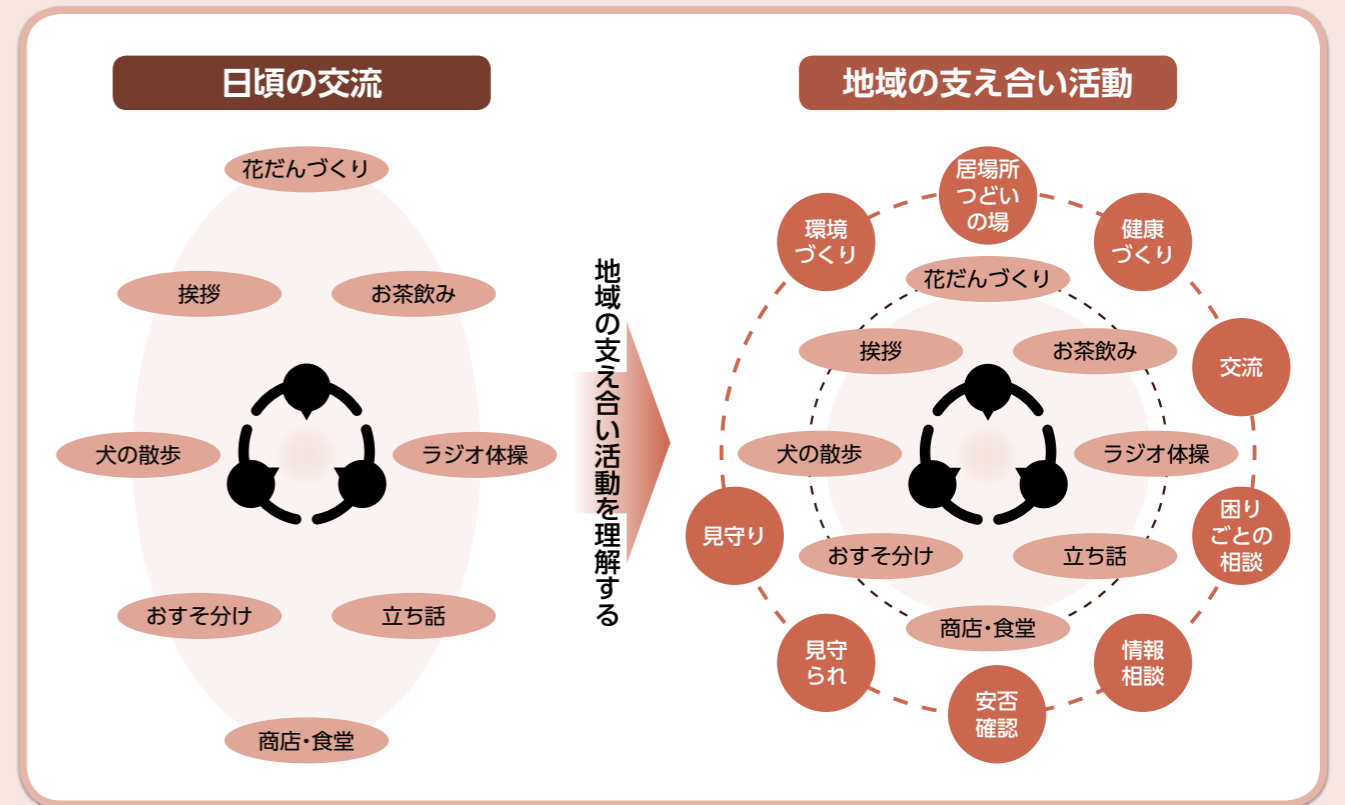
人と人、人と場所や支援、情報をつなぐ
今までつながりのなかった人やものがつながることで、プラスαの効果を生むことがあります。
例えば、高齢者が集うサロンと子育てグループが一緒に活動したら:
子どもたちがいることで、高齢者サロンは活気づきます。子どもたちは、昔遊びを教えてもらったりしながら高齢者と一緒に過ごす

時間を楽しむことができます。高齢者も子どもたちと関わることで役割ができ、新たな生きがいや充実感を得ることができます。
子育て世代のお母さんは、高齢者に子どもを任せて、子どものことを気にすることなく話をして、息抜きをすることができず。また、子育ての不安や悩みを先輩である高齢者に相談することもできます。
このように、今までバラバラで活動していた2つのグループが交流する



ことにより、思わぬ効果やつながりが生まれます。
これからは、このようなつながりが重要になります。何かがあったときに助け合える、声かけがしあえる関係が地域には必要なのです。

まずは地域にある「交流＝宝物」を見つけること



下田学区まちづくり協議会は、学区民のだれもが愛着と誇りをもって、生きいきと安心して暮らせる地域をめざして活動しています。
下田学区は、高齢化率の高い地域でもあります。これから先を考えると、車での移動が制約される人・介護が必要になる人が増えてくることは間違いないと思います。それが5年後、10年後になるのか分かりませんが、それを想定した準備として、昨年「ちよこつとお手伝い」という助け合いの事業を始めました。ゴミ出し・家具の運搬などの作業で困っている人と地域のサポーターを仲介する仕組みです。このような活動を通して、お互いが支え合い、安心して暮らせる地域作りにつなげていきたいと考えています。
今後の課題は、ずっと存続できる運営体制を築いていくことだと思います。次にバトンタッチできる若いスタッフの発掘と育成できる仕組みを定着させていきたいです。



下田学区まちづくり協議会
峰 克司さん

おわりに

今後も、このような地域ごとの話し合いを行い、自分に行うこと(自助)、隣近所ができること(互助)、地域ができること(共助)、行政ができること(公助)を考え、地域と行政が一緒になって地域での生活をどう支え合い、楽しく生活できるかを考えていきます。
また、地域でも、率先して地域を引っ張っていただける人を作っていたいただき、その人と共に地域の支え合いづくりを行っていきます。

☎ 社会福祉課(東庁舎)

☎ 71・2327 ☎ 72・3788

高齡福祉課(地域包括支援係)

☎ 保健センター ☎ 71・4652 ☎ 72・1481